

荘司 一步

1. 事業実施の目的

クルス・ベルデ遺跡出土考古遺物の整理・分析作業

2. 実施場所

ペルー共和国、ラ・リベルタ州、マグダレーナ・デ・カオ

3. 実施期日 平成 30 年 2 月 24 日(土)から 3 月 15 日(木)

4. 成果報告

●事業の概要

【調査活動の目的と調査対象】

本調査では、クルス・ベルデ遺跡において昨年度におこなった発掘調査をふまえ、そこで収集した考古遺物の整理・分析作業を行う。この調査の目的は以下の 2 点に要約できる。

①クルス・ベルデ遺跡を残した人々の物質文化（とくに土器）の解明および、その活動時期の検討

②学術論文の作成に向けた、データの整理と記録

ペルー共和国、ラ・リベルタ州に位置するクルス・ベルデ遺跡は、海岸線から 200m ほどの距離にあり、アンデス文明初期にあたる古期（紀元前 5000～3000 年）と形成期中期（紀元前 1200 年～800 年頃）[表 1 を参照]を中心に断続的に利用された漁撈集落であった [図 1]。この遺跡は「A-2 マウンド」とその周囲に広がる「A-1 平坦面」の二つの区域から構成されている [図 2]。そのうち、主に今回の分析対象となるのは A-2 マウンドの CV-II 期の層位から出土した土器片であり、このマウンドは小規模な漁撈集団の協働によって建設された公共建造物であることが明らかになった。分析作業は遺跡近郊のマグダレーナ・デ・カオ村に滞在しながら 1 週間行った。

【調査の背景】

過去の発掘調査と考古遺物の分析によって、クルス・ベルデ遺跡では、先土器時代にあたる古期（紀元前 5000～3000 年）から、小規模な漁撈集団の協働によって徐々に墳丘が建設されていったことが明らかになった。この墳丘が A-2 マウンドであり、この時期の活動は CV-I 期（紀元前 4200～3700 年）と名付けられている。

この A-2 マウンドは一度放棄されるが、その後 CV-II 期になってマウンドの頂上部が再利用される。具体的には、7m×11m の大きさを持つ、石製の堅牢な部屋状構造物がマウンド上に建設されるようになるのである（写真 5）。これもまた、小規模な漁撈集団の公共建造物であるといえる。この CV-II 期の地層からは、ごく少量ながら土器が出土してお

り、一見すると、A-1 平坦面から出土する土器と類似している。しかしながら、A-2 マウンドの土器の詳細は明らかではなく、その特徴を把握するための分析が必要である。一方の A-1 平坦面では、土器を中心とする様々な考古遺物や住居址が検出されている。昨年度の学生派遣事業によって、この土器片の観察と分析を行った結果、A-1 平坦面では形成期中期（紀元前 1200 年～800 年）にあたる居住活動が行われていたことが明らかになった。

以上をふまえて、本事業では、A-2 マウンドの CV-II 期から出土した土器片の詳細な観察を行い、A-1 平坦面の土器および周辺の他遺跡出土土器との比較を試みる。これによって、A-2 マウンド CV-II 期と A-1 平坦面で活動が行われた形成期中期との関係を明らかにし、ペルー北海岸の編年における CV-II 期の位置づけの解明に向けた見通しを得ることを目指す。

【実施内容】

■A-2 マウンド出土土器の観察

A-2 マウンドの CV-II 期にあたる地層から出土した土器片の観察と分析を行った。各辺が 1 cm に満たない小破片を排除すると、検出された土器片は合計 22 点である。このうち、口縁部や器形の判別できる土器片、装飾のある土器片は、計 6 点である。この 6 点について詳細な観察を行った。

《ボトル形土器の破片》

口のすばまった壺形の土器に、上へ伸びる注口が付く器形をボトルと呼ぶ。このボトルとみられる土器片が計 2 点検出された。

- 17CV-A-69（写真 3）：E1,2N1 グリッドの第 4 層から出土した土器であり、マウンド上に作られた石積みの部屋状構造物（以下、R1）の内部で検出された。この土器は、単一の注口が長く伸びる長頸ボトルの胴部から頸部にかけての破片である。外面の色調は暗褐色であり、内面および胎土は褐色～赤褐色、胎土中の混和材は少ない。胴部と頸部の境を一周するように一本の刻線が施され、それより下の胴部には刺突文が全面に施されている。胴部と頸部は別々に作られ、後から頸部を胴部に差し込むようにして接合させる製作技法がとられたことが、内面の観察から判断できる。こうした器形と文様パターン、外面の色調は、北海岸の諸遺跡で出土する形成期中期の土器によくみられる。同様の刺突の入ったボトルの破片が A-1 平坦面からも出土している。
- 17CV-A-55（写真 1）：E2S1 グリッドの第 4 層、R1 内部の床面上で検出された頸部破片である。これは、胴部から 2 つの注口が湾曲しながら伸び、途中で接続して一つの頸となる特徴的な器形のボトルであり、その特殊な頸部の形が「鑑」に似ていることから、鑑形ボトルと呼ばれている。鑑形ボトルは、北海岸における形成期から地方王国期にかけて特徴的な土器である。明赤褐色であり、胎土にはほぼ混和材が含まれ

ず、非常に緻密である。外面はやや暗い赤褐色であり、よく磨かれている。胎土の色調と混和材からすると、地方発展期のものに近い印象を受けるが、型入れによって製作されることの多い地方発展期の土器に対して、この破片は手づくねで製作されているなど、時期の特定は容易ではない。また、甕部の形状やサイズについても類例が乏しく、製作時期は特定できない。甕形土器の破片は A-1 平坦面からも出土しているが、破片が小さいために比較が困難である。ただし、胎土の点では明瞭な差異がある。

《小壺形土器の破片》

高さ約 10 cm ほどの小型の壺形土器の破片が 1 点出土している。

- 17CV-A-54 (写真 2) : E2S2 グリッド、第 4 層、R1 内部から出土した。焼成が十分でなく、もろいうえに、器壁は非常に薄い。破片の残存率は完形の 40% ほどであり、直径約 4 cm 程度のやや細長い小壺であったことがわかる。胎土は明赤褐色で混和材はやや少ない。北高地のクントゥル・ワシ遺跡のコバ期（紀元前 550～250 年）に、やや類似した小壺が存在することが報告されているものの、差異も同時に認められる。胎土が大きく異なるうえに、クルス・ベルデ遺跡の資料では、頸部に白い塗料がバンド状に残されている。時期を特定することはできない。

《無頸壺の破片》

A-1 平坦面で出土した形成期中期の土器群の中でもっとも高い割合を占める器形は、頸部のない壺形土器を意味する無頸壺である。この無頸壺の破片が A-2 マウンドにおいても 3 点出土している。

- 17CV-A-63, 64, 73 (写真 4) : E2S2 および E1S1 グリッドの第 5 層、R1 内部から出土した。63, 64 の外面および胎土の色調は暗褐色であり、混和材がやや多い。73 は内外面および胎土の色調は赤褐色、混和材がやや多いなど、A-1 平坦面で出土している 2 つの土器胎土グループ（荘司・ラ・ロサ 2017: 139-141）に対応するような無頸壺の破片が出土している。胎土と色調の類似性は高く、形成期の土器破片である可能性は高い。一方で、製作技法とも深く関わる、口縁部の形態については大きな差異が示唆される。とくに、暗褐色の胎土を持つ 63, 64 の破片の口縁部は、土器の器面を均す表面調整が外側から強く施されている。この表面調整によって、平らに均された面を矢印で示し、A-1 平坦面から出土した土器の口縁部を [図 5] で比較した。A-1 平坦面で出土している無頸壺の口縁部はいずれも、内側に強く表面調整が施され、内側が鈍角、外側が鋭角となる「内切れ」となっているのに対して、A-2 マウンドから出土する無頸壺は、外側から強く表面調整が施されることによって「外切れ」の様相を示している。中央海岸北部のネペーニャ谷では、内切れの口縁を持つ無頸壺が形成期中期、外切れの無頸壺が形成期後期に対応するなど、口縁部形態の差異は時期差を示

している（芝田 2011: 158-166）。北海岸においては、口縁部形態の変化に着目した研究がないために、証拠が十分とは言えないが、同様の差異が時期差を示している可能性は十分にある。北海岸において調査事例の多い形成期前期、中期の無頸壺には外切れの口縁が報告されていないため、少なくとも A-1 平坦面の土器よりも新しいものであると考えられる。73 の口縁部破片についても、外切れではないが極端に口縁部が薄くなるなど、A-1 平坦面に見られる無頸壺とは異なる様相を示している。

以上のように、クルス・ベルデ遺跡、A-2 マウンド出土土器の観察を行った結果、A-1 平坦面から出土する土器群との差異と共通性が明らかになった。共通性としては、刺突文で装飾を施したボトルの存在が挙げられる。このタイプのボトルは北海岸一帯で広く報告されている土器であり、形成期中期に位置づけられるのが一般的である。一方、A-1 平坦面でもっとも多く出土している無頸壺の口縁部形態には、両者に大きな差異が認められた。この口縁部形態の差異は、表面調整の技法や手順の差異によって生まれるものであり、土器製作技術と深く関係している。同様の差異が時期差を表している中央海岸北部の事例や、外切れの口縁部を持つ無頸壺が北海岸の形成期前期や中期で報告されていないことをふまえれば、クルス・ベルデ遺跡の A-2 マウンドと A-1 平坦面の差異も時期差である可能性が高い。今後、無頸壺に関する北海岸の資料と研究事例の増加を待つ必要がある。

これらのことから、A-2 マウンドにおける CV-II 期の地層から出土する土器群は、A-1 平坦面の土器と同一であるとは言えず、形成期中期初頭にあたる A-1 平坦面の土器群よりも新しい可能性が高い。しかし、土器の出土量は極めて少なく、その時期を特定するには情報量が不足している。今後の調査による資料の増加を待ち、他の周辺遺跡の資料を観察するなどして、類例を探していく必要がある。

■データの整理と記録

学術論文の作成に向けたデータの整理と記録作業として、上述の土器の観察と分析を行ったほか、主要な土器破片の実測図を作成したほか、撮影台を用いた写真撮影を行った。学術論文としてデータを公開するうえで、これらの実測図と写真撮影は欠かせないものであり、学術論文の執筆に向けた準備を整えることができた。さらには、骨製品、貝製品、織物のクリーニングと整理作業も実施した。とくに織物は保存環境によって傷む可能性が高いため、専門家のアドバイスをもとに、適切な保存方法をとるなどの処置を行った。

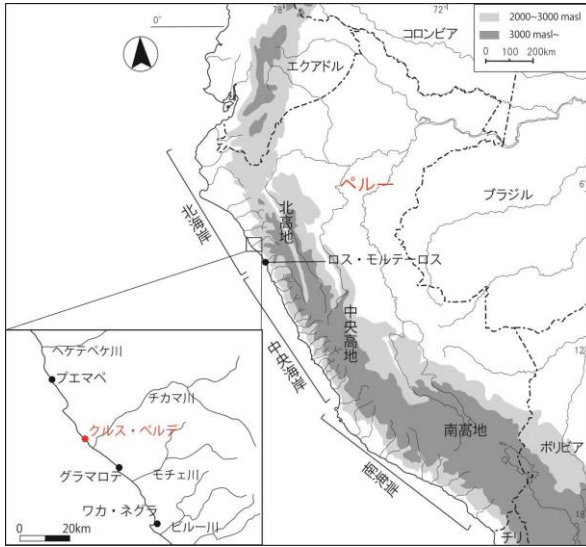


図1 クルス・ベルデ遺跡の位置と周辺遺跡

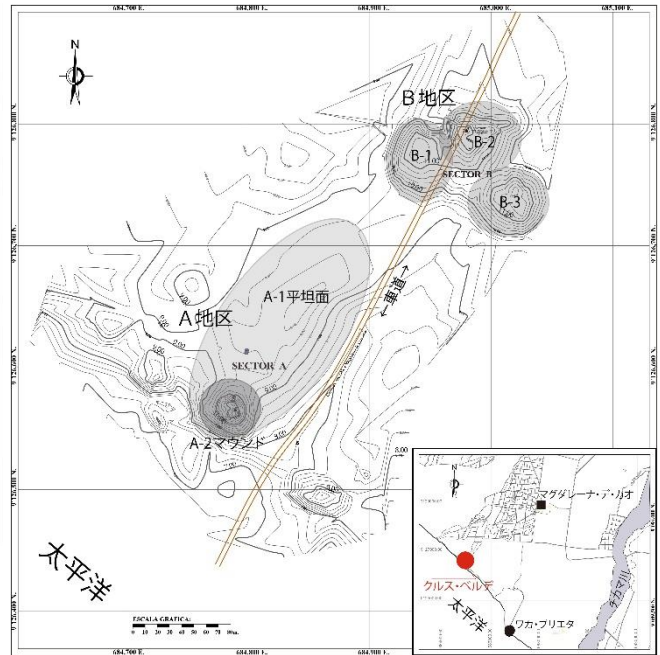


図2 クルス・ベルデ遺跡の地形図と調査区名称

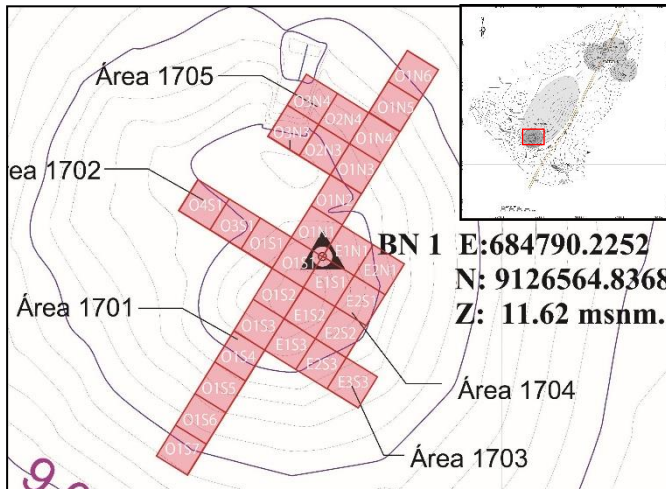


図3 クルス・ベルデ遺跡の発掘グリッド

表1 古代アンデスにおける形成期の編年表
[大貫・加藤・関編 2010 を改]

出来事	絶対年代	時代区分	北海岸	中央海岸	南海岸	北高地
神殿建設の開始 漁撈の発達	3000	古期	ラウリコチャ			
			チルカ			
土器利用の開始	1800	形成期	ワカ・フリエタ	カラル		コトシュ
			クアニャベ			
神殿の発展 冶金技術の発達	1000 800	中期	クビスニケ			
			アンコン	チセピン	クントゥル・ワシ	
灌漑農業の本格化	250 BC AD	後期 末期	ミラマル	パラカス	ワカロマ	
			サリナル	ネクロポリス		
		地方 発展期				

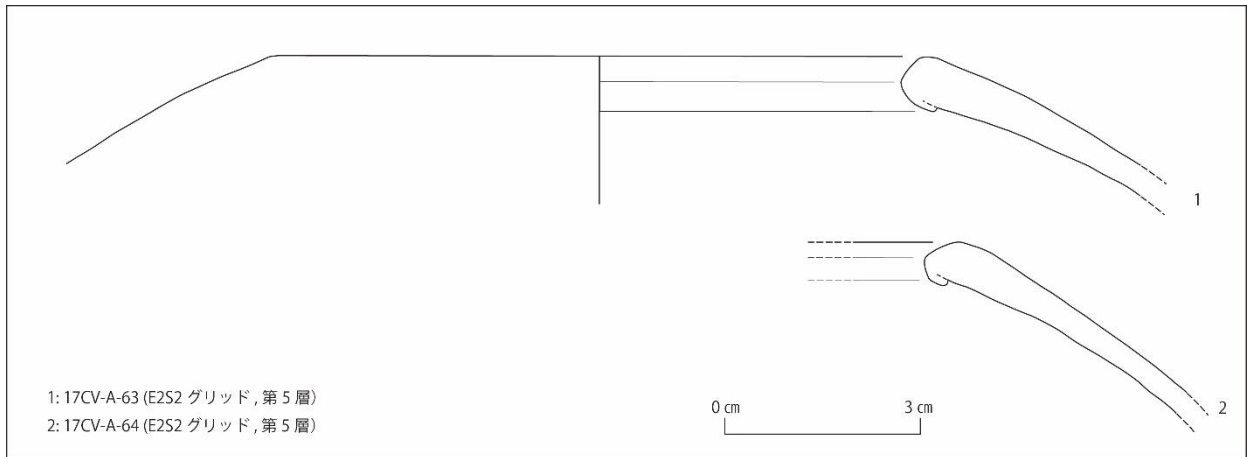


図 4 A-2 マウンドから出土した無頸壺の土器破片断面

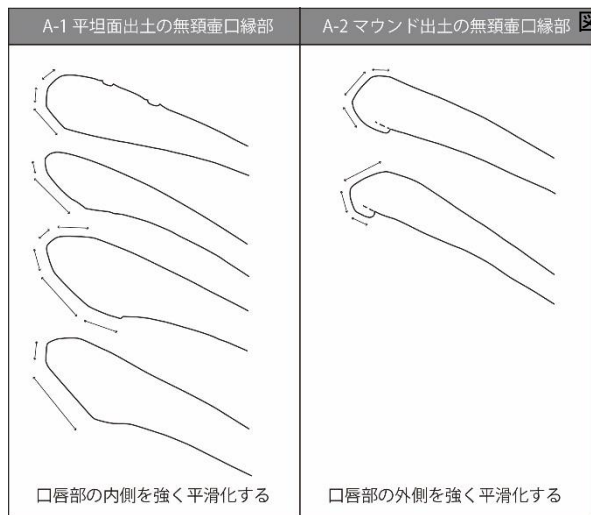


図 5 A-1 平坦面と A-2 マウンドから出土した無頸壺の口縁部形態の比較



写真 1 A-2 マウンドから出土した鐘形ボトル(17CV-A-55)

写真 2 A-2 マウンドから出土した小壺(17CV-A-54)



写真 3 A-2 マウンドから出土した長頸ボトル(17CV-A-69)

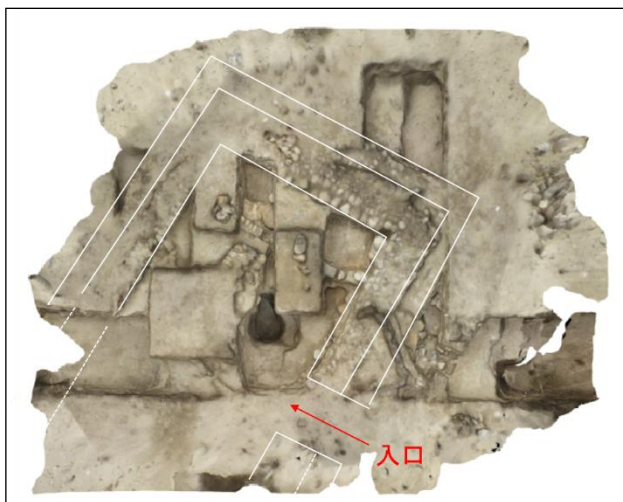


写真 5 A-2 マウンド上に建設された CV-II 期の部屋状構造物



写真 4 A-2 マウンドから出土した無頸壺 (左から 17CV-A-73, 64, 63)

●本事業の実施によって得られた成果

【調査成果まとめ】

クルス・ベルデ遺跡の A-2 マウンド出土土器の観察によって、これらの土器群が、A-1 平坦面から出土する土器群とは多少なりとも異なる様相を示すことがわかった。これは、A-2 マウンドの CV-II 期の部屋状構造物が、その周囲にある居住域での活動と異なる時期に建設されたことを示唆している。この成果は、クルス・ベルデ遺跡で断続的に行われた人間活動を復元し、同遺跡に存在する様々な遺構間の関係性を明らかにするうえで、欠かせない知見であるといえる。出土土器数や類例の少なさから、CV-II 期に対応する時期を特定することはできなかったが、A-1 平坦面から出土した土器との比較を通して、両者の通時的な関係に関する見通しを得ることができた点は、今後の研究と分析を計画するうえでも重要な意義を持つ。今後は、放射性炭素同位体を用いた絶対年代の測定作業を進めながら、他の周辺遺跡の資料の観察を行って類例を探すことで、CV-II 期の活動をペルー北海岸の文化編年の中に位置づける作業を進める。これによってクルス・ベルデ遺跡の長期的な形成過程を明らかにし、博士論文の骨子をまとめていきたい。

また、学術論文として成果を公開していくための実測図の作成や写真撮影などの記録作業、そして、発展的な分析作業のための資料整理を行った点も大きな成果といえる。これらの実測図や写真は、学術論文を作成するうえで欠かせないため、今回の調査によって、成果を公開するための準備が整ったといえる。前年度に行った出土土器の分析と合わせて、投稿論文として発表する予定である。

【参考文献】

大貫良夫・加藤泰健・関雄二 2010 『古代アンデス：神殿から始まる文明』朝日新聞出版，東京。

芝田幸一郎 2011 『ペルー北部中央海岸ネペーニャ谷からみたアンデス形成期社会の競合モデルー神殿、集う人々、旅する指導者』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文，東京

荘司一步・ヴァネッサ・ラ・ロサ 2017 「ペルー北海岸、クルス・ベルデ遺跡出土土器の分析概報」『古代アメリカ』20: 135-150.

●本事業について

博士論文の研究に向けて基礎的な資料とデータを整理・分析した本事業は、調査成果を公開していく過程で必要なものであり、非常に重要な作業である。しかし、他国の文化財を研究対象とする本事業のような考古学研究は、常に他国でデータの整理・分析・記録作業を行う必要があるため、容易に行うことはできない。このような現状において、学生への旅費支援体制としての学生派遣事業は本学の大きな魅力の一つであり、成果を積極的に公開していくうえでも大きな助けとなった。このようなことから、今後もこのような事業が継続される

ことを希望している。